日本医史学雑誌第三十四巻第二号
昭和六十三年四月三十日発行

昭和六十三年二月三日受付

長崎浩斎著『浩斎医話』について

津田進三

越中高岡の蘭方医長崎浩斎は、文政三年師の大槻玄沢から贈られた『蘭東事始』の題名に疑問を抱き、原名は『蘭学事始』である、と主張して注目されているが、これまで浩斎の業績などは、まだあまり解明されていないので、彼の著書『浩斎医話』について少し考究してみたいと思う。

一

加越能三州に蘭方外科をもって知られた長崎浩斎は、大槻玄沢、杉田立卿及び小石元瑞らに師事して蘭方をおさめたが、一方大窪詩仏、市河米庵らに学んで経史にも造詣が深く、その蔵書五千巻と称せられ、常に好んで諸医書などを考証している。

彼の著書は、東條耕輯の『近代著述目録後篇』(一)巻三には

家蔵千文蒙求書目　一
半千文　一
医話　三
医学物語　二

百医蒙求　一
和蘭医学解嘲　一
和魂漢才　二
籤舎随筆　二
医経千字文校刊　一

などがあげられている。このうち『医話』(浩斎医話)は医事に関する随想録であって、彼の医学思想などを知る上で、最も注目すべきもののようである。

『浩斎医話』(高岡市長崎圭爾氏蔵、自筆稿本)は版心下部に「養浩斎」と印刷された半葉に各十行ずつの野紙五十一枚を綴ったもので、「文政十丁亥正月起草」とあり、はじめ『贅語』と題されたが、「贅語之号　在三浦安貞之梅園三語之一　故須冠浩斎之二字」として『浩斎贅語』と改められている。

更に「天保七丙申二月二日装釘　改名行医余言　蓋本于香川氏行余医言之名也」と記されていて、脱稿の際に書名は、『行医余言』と改称されている。しかし現存の稿本では、その内題を朱字で『浩斎医話』と重ねて訂正されている。

『浩斎医話』(以下『医話』と略す)の本文は随時書き溜められたものを、その見出し標題をもって、いろは順に分類合綴したもので、朱筆や墨書の頭注や追記も多く、まだ未定稿のようである。しかしその内容は自分の身辺雑事や経験、感想などのほか、父や友人などからの伝聞も多く記しているので、浩斎の伝記を補う点も多く、彼の具体的な人間像をよく知らしめるようである。

二

長崎浩斎の伝記(二十三)にはその長子の正国の書いた『浩斎先生小伝』がある。

「浩斎先生小伝　長崎言定

先生諱健　字中正　橘姓　長崎氏　通称愿禎　浩斎其号也　越中高岡人　父寿　字莱福　富山下太夫吉川敬明次子吉川氏以二楠氏裔一　事二本藩一　故以レ橘為レ姓　先生為レ人廉潔慈祥　篤信二袁氏立命学一　故周二人急一救二人難一　而不レ衿二己能一　称二揚人善一　家世業レ医　至二先生一益行　四方麕至戸外履常満　不二独本州一加能及飛弾越後之人　裹糧信宿而乞レ治者亦甚多焉　先生読書之外無二他嗜好一　雖二業極二繁劇一　未二曾一日廃二読書一　蔵書五千巻　雌黄殆遍　年十九遊二江戸一　入二磐水大槻先生之門一　伝二西洋医法一　蓋加越之内　唱二蘭学一者　以二先生一為二嚆矢一　著有二蘭学解嘲、浩斎医話数篇一　又好二周興嗣千字文一　輯二其異文一　和漢凡三十余種　名曰二千字文集一　将二刻以問レ世　未果而歿　先生以二寛政十一年己未九月七日一生　以二元治元年甲子九月十四日一卒　寿六十有六　有二三男三女一　長男正国承レ家　二男皆夭　長女適二有磯祠官上田悌信一　仲女適二富山下太夫林英尚一　季女適二富山大属吉川敬晁一　皆有二子五人一　皆男其長者已入レ学　人以為二先生余慶一云　不肖男橘正国謹誌」

一方また浩斎の妹とらの子の阿波加脩造が記した『春塘随筆』も興味深いものである。

「春塘随筆　阿波加脩造

安永ヨリ文化ニ至ル頃　高岡町ニ長崎芳洲翁アリ　外科医術ヲ以テ大ニ行ハル　本萩原氏ナリシガ曾テ肥前長崎ニ於テ蘭医某ニ就キ其業ヲ受クルヲ以テ　誰言フトナク長崎医者ト持テハヤサレ　竟ニ長崎ヲ以テ自称スルニ至ル　人トナリ豁達ニシテ客ヲ愛シ　子女ヲ教育スルニ常規ヲ以テセス　子名ハ健　字ハ玄貞　養浩斎又清風明月楼主人　鵁郊居士ナドノ号アリ　字ヲ以テ行ハル　家学ヲ伝ヘテ益々其業ヲ盛ニス　学識渕博　詞藻豊富　詩賦ヲ大窪詩仏ニ　書法ヲ市河米庵ニ学ビ　交遊之盛一時ヲ圧倒ス　千字文　蒙求ノ二書ヲ愛読シ　各数十百種ヲ聚メ　書庫ヲ号シテ千文山蒙求寺ト称スルニ至ル　奇癖思フヘキナリ　嗚呼博洽ノ資ヲ以テ芳洲ノ業ヲ継ク　一時ヲ風動スル亦宜ナラスヤ…（後略）」

このうち長崎へ改姓の年代は誤りで、浩斎がその著『蘭学解嘲』(四)の自序に「予家高祖亦江戸人　夙負笈于長崎学和蘭外

科　遂来越中住高岡　歿于享保十八癸丑之夏」と記しており、この初代萩原孫兵衛が改名して長崎玄澄と称したのがはじまりである。

長崎家は初代玄澄（享保十八年六月九日没）のあと、二代玄貞（安永六年二月二十九日没）、三代玄貞（玄周）（安永八年十一月二十六日没）を経て、四代玄庭（蓬洲又は芳洲）（文政十二年十二月九日没）が浩斎の父である。

三

長崎蓬洲は蘭方外科を以て近隣に聞こえ、『天狗爪石雑考』『蓬洲随筆』『辛亥日記』などの著書があり、さらに画家堀川敬周に『解体略図』を描かしめたという。

蓬洲には二男一女があり、長男は富山藩の吉川氏を継ぎ、次男が浩斎で、その妹とらは佐渡家に嫁して佐渡三良、坪井信良、阿波加脩造ら七男五女をあげている。

寛政十一年（一七九九）九月七日高岡に生まれた浩斎は、はじめ父から医書経史を学んでいる。浩斎は非常に父を尊敬しており、その没後も天保二年に『蓬洲翁行状』を、さらに天保十二年には『尚素蓬洲翁』をそれぞれ執筆して父を偲んでいる。

また天保九年に浩斎の記した『餞甥襍記』（高岡市佐渡養順氏蔵）には、「予在江戸也　先考寄書　使予毎日灸三状于足三里　以預防脚気腫」とあり、父の愛情に感謝している。

蓬洲について『医話』には次のような興味深い二つの記載がある。

「自病　丙戌ノ冬（筆者注、文政九年）（以下同じ）家父超願寺ニテ津島竹山及内藤金圃ト相会シ談次自病ノ事ニ及ブ家父云我今迄自病自治　以後トテモ心気ノ乱レヌ病ナレバタトヒ危篤ニ至ルトモ必公等ヲ煩サズ自匕ヲ以テ療ズベシタトヒ死ストモ何ゾ他医ノ薬ヲノマント　但夢中ニナリテ人事ヲ省ミザル症ナレバ家人ノ取計ニ任スベシト　丁亥（文

政十年）ノ二月廿三日夕健タマタマ医事古言ヲ両読スルニ第十三頁ヲニ吉益翁ノ論アリ　家父ノ見ト暗合ス」

「長病健問テ曰長病ニ長服スルハムダ事ニアラズヤ　薬セズトモ時節到来セバ自ラ治スベシ　家翁答テ云然ラズ　苗ヲ挿テ打捨ヲクトキハ長ズベカラズ　然レトモソレニ慢ニ肥糞スレバトテ七月ニ至テ刈取ル事ヲデキズ　只時節ト肥糞ト相対シ晴雨宜キヲ得テ豊穣ス　病モ亦然リ　捨置テハ愈長ク又急ギテ日ニ五服六服ツヽ飲マシメテモ急ニ愈ベカラザル症モアル」

四

文化十年（一八一三）浩斎はこの年高岡に移り住んだ高峰幸庵(五)について蘭方を学んでいる。幸庵は諱は寛容（ノブモリ）、号を昇亭といい、文化三年吉益及び賀川両氏につき医を修めたが、更に江戸へ出て杉田、桂川及び大槻氏らの門に学んだ蘭方医であった。

高峰家は医家初代の岩城慶安が京で半井驢庵に医を学び、江戸にて越前福井の松平氏に仕えて侍医となり、元和九年越後高田への国替えのため移住したが、二代仙庵のあと、元禄十二年藩主が作州津山へ国替えのとき、三代元陸が幼少のため高田に留まり高峰姓に復した。四代幸庵、五代幸伯のあとがこの幸庵であって、高峰幸庵は文化十年高岡に移住し、忽ち一日千服の薬を出すとの評判を得たようである。

翌文化十一年に浩斎は師の幸庵のすすめで京の賀川玄岱に産科を学んでいる。現在長崎家に「平安済生館主人書以与長崎康斎生、文化十一年甲戌五月」という免状一軸がある。

浩斎は産科を非常に重視しており、『医話』にも興味ある記載が多いので、その二、三を引用してみたいと思う。

「産ハ人生ノ大本　病ニアラズト雖モ難ニ至テハ救ハズンバアルベカラズ　故ニ医各科アリト雖モ苟モ医ト称スレバ学ブ事最要タリ　先師高峰幸庵先生夙ニ京ニ遊デ賀川玄迪子ノ門ニ入学ブ事多年　其術ニ達セリト雖モ眼科ヲ専門トスル

ユヘ療ヲ乞フ人少ク　高岡ニテハ一人モ術ヲ受タル者ナシ　健曾テ子玄子産論及翼ナドヲ講ズルヲ聴且蘭説ヲマジヘ学デ　十六才ノ春京ニアソビ今ノ賀川玄岱子ニ謁シ　幸庵先生ノ命ヲ奉ジエギリス産術ノ器ヲ木ニテ造リ贈リ　且イハユル回生術ノ秘伝ヲウケ免許ノ一巻ヲ領受シ帰ルト雖モ　未ダ曾テ一人モ療ゼシ事ナシ　友人粟田庸斎ハ奥道悦翁ノ門ニ入リ一年強学デ帰リ　屢〻術ヲホドコシテ功ヲ奏ス　玄勇子亦是ヨリサキ道悦翁ニ術ヲ受ケ帰ルト雖モ其回生術ヲ施シタル事ヲ見ズ　健ト一般ナルニ似タリ　健其術ヲ学ビヲキタルユヘ庸斎ノ難産ニ遇テ回生ヲ施サント欲シ病家狐疑シテ決ザルトキハ必予ヲ迎シメ予ヲシテ其術ヲ受ン事ヲ勧メシメテ而後ニ施セシ事数度ナリ　賀川氏ノ方法人間ニヒロマリテ其益少ナカラズ　其門人片倉元周亦発蒙ヲアラハシテ闕ヲ補ヒ誤ヲ正ス　故ニ翼図ノアヤマルトコロホゞ賀川氏ニモ改刻セリ　近ゴロ江戸ノ立野龍貞ナルモノ南総ヨリ出テ　産科新論三冊ヲ著刻シ大ニ賀川氏ヲ駁ス　其中鎮帯ノ事ヲ戒メズ是偏ニ賀川氏ニ異ナラン事ヲ求メテ勉テ反スルニ似タリ　健カ妹及妻両人トモニ帯ヲ施サズシテ安産スル事凡ソ七度　未ダ曾テ難産ヲ見ズ　以テ他ニ及ボシスヽメテ帯セシメザルニ皆軽シ　タトヒ帯ニテ難産ニ至ラズトモ緊クスレバ必ズ兎唇ノ児ヲ生ズ　因テ戒メテ緩カニセシメズンバアルベカラズ　龍貞一見識アリトモ雖モ一疵ト言ベシ」

「白牡丹ハ胎ヲ堕スル婦人ノ号也…（中略）…医タルモノ慎ベシ　賀川ニ入門スルトキハ七ケ條ノ誓書ヲ書セシメ血判ヲ取也　其一大要ハ堕胎ノ薬剤不可用ノ事也」

「産母新乳不可捨ノ事ハ洛医彙講ニ後藤左一郎初生禁浴論ノ中ニアリ」

五

文化十二年の冬、浩斎は能登七尾の横川仲蔵を訪ねて、前野良沢の『管蠡秘言』を写して帰り、これを愛読したという。(六) 横川仲蔵は天明八年（一七七九）小石元俊が能登へ往診したときに元俊に入門した蘭方医であるが、(七)『医話』の中で浩斎は横川仲蔵が文化五年金沢で宇田川玄真に学んだ事を記している。

「阿蘭陀流ノ医学翻訳ノ事始リシヨリ都鄙大ニ流行ス　加州ニテハ大梁院殿病中江戸ヨリ宇田川玄真請ニ応シテ来ル時城下并能州越中ヨリモ往テ贄ヲ執ルモノ多シ　此時ヲ始メトス　七尾ノ横川仲蔵モ其時入門シテ後ハ宮谷謙蔵ト云堀松村ノ神職ヲ江戸ヘヤリ　写本ヲサセテ取リ学ブ　高岡ニテハ内藤元鑑（今金城ノ同姓ヲツギ官医トナリ居）往テ入門ス」

文化十四年（一八一七）浩斎は江戸へ出て杉田玄白に師事せんと熱望し、師の高峰幸庵の書状をもって三月二十四日高岡を出立し、四月九日江戸に着き、父と親交のあった石門心学の脇坂義堂宅へ逗留した。しかし杉田玄白の病が篤く、四月十七日遂に没したので、浩斎は五月二十八日大槻玄沢に入門した。[八] さらにまた杉田立卿の天真楼塾にも入門[九]しているが、『医話』にはそれぞれ次のような記載がのせられている。

「南部伯民ハ周防ノ学医ナリ　健丁丑ノ夏（文化十四年）磐水先生ノ塾ニ在テ蘭畹摘芳ノ次編ヲ借写スル中ニ伯民ト問答ノ書雅俗混ジテ数通アリ　健漸ク其ナカ一ヲ抄写シ帰ル　甚問ヲ好ム人ニテ最謙辞敬語ノミナリキ　癸未ノ年（文政六年）始テ技癢録ト難病治験方ヲ購読テ愈ソノ博識ニ感ズ　後感ジタル趣キヲ書テ磐水先生ニ送リシカバ　其答書ニ甲申ノ歳（文政七年）ヤラニ死セシ由ヲ告ラル　水戸ノ原氏ト相対シテ相慙ズル事ナカルベシ」

「乳岩　乳岩ノ一病漢土ノ医書ニテハ皆不治ト断リ置ケリ　独嘯庵ノ漫遊雑記ニ紅毛人截断スルノ法アリト聞ケトモ未ダ試ミズト書ケリ　花岡随軒コレヲ見テヨリ憤発シテ　自ラ一料簡ヲ以テ麻薬ヲ与ヘ之ヲ切テ一人ヲ療ズ　其婦暫時月日ヲ経テ死スレトモソレニモ懲リズ又一婦ヲ療ズ　幸ニシテ二年モ存命セリ　是ヨリ其名都鄙ヲ傾ク　塾生モ多クナリタリ　後吾師江戸ノ杉田立卿先生モ蘭説ニ従テ一婦ヲ療ジ　療乳岩記ト云一小冊ヲ刻シテ生徒ニ示ス　予モ其後入門シテ親ク其術ヲ受ク　花岡ノ門人宮川順達モ其療ゼシトキ来リ見テ随軒翁ノ取為ト異ナラズト云テ賞嘆セシ由也　然レトモ其婦モ一二年ヲ経テ死スト　其後亦両三人療ゼラレタレトモ兎角再発スルユヘ今ハ断リテ療ゼズト答示メサル　友人土肥恭蔵モ紀州和歌山ノ儒官岸順蔵ノ家ニ在テ屢〻花岡ノ塾ヘ往来シテ其施術ヲ目撃スレトモ　皆再発シテ死スモノ多キ様子ナリ　因テ思フニ自然ト腐蝕翻花シタル乳岩ハ五年乃至七年モ煩ヒナガラ存命スレバ　畢竟術ヲ施シテ命期ヲ促

ス道理ナレバ自然ニ任セ不治ニシテ捨ヲク方ガヨシ　サスレバ漢土ノ医ハ却テ卓見ト称スベシト丁亥（文政十年）二月初来テ予ニ語ル　サレトモ随軒翁ハ外療ノ施術ハ甚ダ上手ニテ外ノ療治ニハ嘆ズベキ事多シト云」

この乳岩についての記載は『医話』の中でも最も注目すべきものの一つで、大槻玄沢が愛読したという永富独嘯庵の『漫遊雑記』のことや、杉田、大槻両家と華岡青洲との間を仲介した宮川順達のことなどがみられて誠に興味深いものと思われる。

六

浩斎は父の命により同年文化十四年の八月十一日に江戸を立ち、八月二十九日高岡に帰国している。このとき玄沢と桂川甫賢から蘭文の書とその訳とを贈られている。この間古河の河口祐卿と親交を結び、また師の二男平次郎（盤溪）を年下の師として教を乞うている。そしてこの年十二月高岡の小児科医金子梅窓の二女と結婚した。

『医話』によれば浩斎は文政二年に大病を患ったようである。

「按腹ノ術ニテ諸病ヲ治スト云説アレトモ信ジガタシ　孕婦ニハ最モ肝要ナリ　男子ノ病ニテハ疝積留飲痞悶動気ノ症ニハ必功アリ　邑人藤浦勾当甚ダ老練セリ　健己卯ノ年（文政二年）大病ヲ患ヘ屢ミ其術ヲウケテ功効ヲ覚ヘリ」

文政三年（一八二〇）五月杉田玄白の三年忌のため江戸へ出た浩斎は、五月十八日晴曠楼の宴に出席している。[10] そして恐らくこのとき浩斎は師の玄沢に杉田玄白の『蘭学事始』の入手方を依頼したものと思われ、この年九月玄沢は門人に筆写せしめて『蘭東事始』を浩斎に贈っている。[11]

『蘭東事始』を入手した浩斎は、早速『九幸老人小伝』を執筆してこの書に挿入した。そしてまたこの書の原名は『蘭学事始』の筈である、と玄沢に問合わせている。これに対して玄沢は『蘭学事始』も『蘭東事始』も両方とも自分が命名したものであるとの返書を浩斎に与えている。[12]

このように浩斎は帰国後もしばしば玄沢と書簡を交換して、蘭方薬などの疑問を問合わせたり、医書などの入手を依頼しているようである。『医話』にも次の記載がある。

「奇疾便覧　五冊　摂陽下津寿泉選　寿泉一号春抱子ト称ス　近代名家著述目録ニ本朝名医類案ヲ著ストアレトモ其書板本アルヤ否ヤ　京坂及ビ江戸大槻先生ニ乞テ捜索スルニ未ダ手ニ入ラズ」

「ルザラシ　漢名詳ナラズ　物品識名ニモルザラシト而已出テ居　蘭畹摘芳次編巻一ノ末ニアリト雖モ未刻行　留沙刺志ト塡テアリ　物類品隲巻四廿三ヲニモアリ」

「コロツプ　フラスコノ口サシヲコロツプト云ハホロツプノ訛ニテ　ホロツプハフラスコノ口ノ事ニテクチザシハキヨルコト云モノ也　物類品隲巻四廿三ヲニ詳也」

七

文政八年（一八二六）九月浩斎は師玄沢の七十の賀とその著『重訂解体新書』の上梓を祝う宴に出席し、五言百句を献呈して喜ばれたようである。そして翌文政十年一月浩斎は『浩斎医話』を起草したが、九月に大槻玄沢が没したのでその葬儀に江戸へ出ている。

天保三年（一八三二）三月十三日浩斎は『重訂解体新書』附録に触発されて『蘭学解嘲』を起草し、漢方医の蘭学批判に答えようと志している。浩斎の医家各派に対する認識は、『医話』をみると次の通りである。

「古方家及ビ後世家皆蘭説ヲ誹リ笑ヘドモ　泊芙藍　一角　蜊蛤石　ナドヲ兼用シ功ヲ取テ泰然トシテ居ルモ　儒ノ臨終ニ仏名ヲ称フルガ如シ　言行ノ斉シカラヌハ古今ノ通弊ナリ」

「陰陽ノ二ツハ天地人物ノ間ナクンバアルベカラザルモノナリ　然レドモ陰陽ニ五行ヲツケテ云ユヘニ古方家蘭学家ハ笑フ也　五行配当ノ説ヲ駁センタメニ陰陽マデヲ毀破スルハ誤ナリ　猶程朱ヲ譏テ思孟ニ及ボスガ如シ　洛医彙講巻二

武川幸順ノ説ヲ見ルベシ」

「儒医ノ称ハ漢土ニモ多シ　続医説ニモアリ　日本ノ儒医ノ辨仁斎翁ノ文　日本文鈔ニモ出タリ　本集ニモアリ　又儒医論春台文集ニアリ」

「梵医ノ方専門ノ書ハ天竺ヨリ漢土ヘ来ラヌ由　曽テ東林上人ニ聴ニ仏律ニテハ菩薩以上ノ人ニアラザレバ医方ヲユルサズトナリ　今村落ノ僧徒医ヲ業トシテ衣食ヲ助ル人少カラズ　皆破戒ニ似タレトモ辺僻ノ地ニテハ随分有テ益アリ専門ノ医者極僻地ニ居テハ糊口ニ乏シキユヘ僧ニシテ之ヲ兼ヌレバヨキ事ナリ」

「南蛮流ノ外科ト称スルモノ昔流行セル由ナリ　阿蘭陀流ト並ヘ行ハルヽト雖モ今ハ混ゼリ　按スルニキリシタン耶蘇宗門ノ邪僧口授セシ方法ト見ヘタリ」

「本草ノ学モ医家ノ専務ナレドモ今ハ本草家ト云ヘバ別ノヨウニナレリ　尤モ稲若水　松岡玄達　近来ニテハ小野蘭山等ミナ一家ヲナセル儒家ナレトモ　本草学ニクワシキヲ以テ医者ノヨウニ聞ヘリ　此学モ蘭山ニテ大成セリ」

天保五年浩斎は同門の先輩小石元瑞に師事し、翌年春には元瑞から『究理堂誡諭』を贈られている。更に天保八年十月十七日元瑞の来訪を得て『蘭学解嘲』の添削をうけている。この『蘭学解嘲』はさらに天保十年に岡田英之と津島俊の序と五十嵐篤好の跋を得て着々と刊行の準備を整えたが、恐らく元瑞の勧告により遂にその出版を断念したようである。

八

天保十一年十二月八日浩斎らは、文政四年以来中絶していた高岡の医師の集まりの「神農講」を再興した。浩斎の医療観としては「医話」には次のような記載がある。

「人ヲ医スル事病ヲ医スヨリ難シ　橘南溪ノ北窓瑣談ニノスル盗人ニ肺ヲ乾カス薬ヲ与ヘシ事　中沢道二翁道話ノ二編ノ下ニアル嫁ガ姑ヲ殺サントシテ毒薬ヲ医者ニタノミシ話ナド　皆人ヲ医スルノ手段ナリ」

「受合療治ト云事ハ医ノスベキ事ニアラズ　イワユル野士ノ業ナリ　タトヒ金銀ヲ取ラズトモ口頭ニテ是ハ急度治スナド受合フ事モ誠ニ鄙劣ナル言ナリ　カルキ感冒モ変ズレハ重キ疫トナリ　ヤミ目モ転ジテ風眼トナル事アリ」

嘉永六年（一八五三）九月二十一日高岡に大火があり、不幸にも浩斎の三層の「清風明月楼」も焼失し、数多くの蔵書を失っている。この清風明月楼は文政四年の高岡の大火のあとに新築され、その時の祝賀の詩韻が高峰家旧蔵の『萬宝録』（金沢市山森青硯氏蔵）にのせられている。

「新構楼題此詩号曰清風明月之楼　張浩斎

数竿脩竹一株梅　此裡営楼隔世埃
白水青山雖乏景　清風明月入欄来

次韵浩斎子清風明月之楼　詩仏

虚心如竹瘦如梅　胸裏何曾着黙埃
独臥高楼風月夜　吟詩声下半天来

同上　清斎

有竹楼頭又有梅　幽香翠色遠塵埃
定知吟社江山客　歳月乗風日夜来」

浩斎はこの清風明月楼で日夜読書にふけり、また諸書を考証した。『医話』に引用された書目は八十数種以上にのぼり、一方『蘭学解嘲』に引用の二十一種の書目とは、その重複は僅か数種のみである。坪井信良が兄の佐渡三良に宛てた書簡にも「長崎老人杯之急度可珍玩書ト相考申候」[一三]とあるように、浩斎の蒐書癖は有名であったようである。『医話』には次のような記載がある。

「月湖ト云人ノ著ス産科秘録ト標題セル本二冊　丙戌ノ冬（文政九年）藤浦彦伶ヨリ借覧ス　丁亥（文政十年）ノ三月

廿九日夕　本朝医談ヲ再読スルニ十九頁ニ載ル済陰方ノ事也」

「癩病ノ療方ヲ書タル南山一家言ト云一冊子ヲ柴田芸庵ノ義父玄徳　桑原某ヨリ三十金ヲ出シテ伝授ヲ受秘蔵ス　門人岩松良碩偸写シテ蔵ス　後高峰玄台子ニ貸シ写サシム」

九

元治元年（一八六四）九月十四日浩斎は六十六歳をもって高岡で没した。彼は生涯多くの師友に恵まれたが、その友情は深く厚いものであった。『医話』にも次の記載がある。

「能州七尾ヨリ二里許町村ノ標左エ門ト云農家アリテ　蘭山ノ門人ニテ甚ダ精シク数百種ヲ栽培シテ自ラ娯ト聞ク　亡友津島玄勇モ至テ嗜ミ　京師ニ遊テ山本永吉ノ門人トナリ大ニ研究シ帰リ　時ニ山行シテ採薬ス　ヲシバハ年ヲ経テ腐ルトテ城端美濃帋ヲ冊トシ　葉ニ墨ヲヌリテ其冊子ニ搨シ　数百種ヲ蔵セリ　人トナリ温柔和易ヨク人ト交リ書ヲ読事ヲ好ミ酒ヲ愛ス　惜カナ文政辛巳（文政四年）ノ火災後疫ニ染テ九月十八日其岳父津嶋屋小右エ門ノ家ニテ卒セリ　其時妻孕居レリ　後男子ヲ産ス　健コレヲ其兄竹山ノ家ニテ見ルゴトニ暗ニ昔遊ヲ思テヤマズ卒スルニ年纔ニ二十九歳ナリ　竹山玄勇兄弟ノ祖父ノ弟常之進ト云人ハ松岡玄達ノ門人トナリ本草学ニ長ゼリ　大坂ニテ木村吉右エ門蘐園堂ノ師トナル　後大坂ニテ卒ス　墓モ大坂ニアリ　書画一覧ノ松岡門人ノ条下ニ其姓名アリ　没後モ蒹葭堂ヨリ津島ヘ来ル書翰数通及蘭竹ノ対幅ヲ蔵セリ」

浩斎の学問への志は高く、その情熱は驚くべきものがあった。彼の理想は学術両全の医にあり、その意味で多紀安長らを高く評価していたことが『医話』に記されている。

「療術学識両全ノ医甚ダ少シ　香川太冲ノ如キ先哲叢談ニ云ヘル事アリ　多紀安長翁モ相似タル由也　近来水戸ノ原南陽ノ如キハ両全ナルニ似タリ　花岡随軒ノ如キハ術ノミニテ学ナシ　或人問テ曰医学アリテ術ナキト　術アリテ学ナキ

ト孰カ優レル　健答云学医タトヒ術ニ拙キモ著述アリテ後世ニ伝ヘバ其益永ク窮リナシ　術アリテモ学アツテ伝ヘザレバソノ人一世ノ功益ノミニテ　従ヒ倣フ人モ精ク得ガタシ　然レバ自ラ長短分明ナリ　只少シク学アリテ療術ニ拙カランヨリハ　療術ニ長ジテ学ナキハ猶現益アリ　今ノ世只両短ノ人多ク両長ノ人少シ　嘆息スベシ　健ガ如キハ幼ヨリ両長ヲ兼ント欲ス　自ラ分ヲシラズト云ベシ　児童輩ドチラカニテモ一長ニ志サバ可ナルベシ」

「医ヲ業トスルモノ博覧ノ誉アルモ多ハ雑書ヲ渉猟スル人ナリ　医書ノミヲ博覧シ尽シテ　加之他書ニモ渉ル人ハ法眼多紀安長丹波元簡先生一人空前絶後ト謂フベシ」

そして浩斎は「医話」の中で次のように記している。

「利ト名トハ人生逃レガタキ二大厄ナレドモ利ハ最モ忌ムベシ　名ハ貪ラズシテ愛スベシ　利ニ走テ名ヲカマワヌヨリ名ヲ求テ利ヲ忘ルレバ仁ニアラズトモ侠ニ近シ　医家常ニコレヲ慎ミ思フベシ」

「三都ノ人ハ兎角イナカ者ヲ侮リ笑ヘドモ豪傑ノ士ハ田舎ヨリ出ル事古今多シ　然レドモ其地ニ生レテ其地ニ居ナガラ名ヲ発スル人ハ少シ　大抵一度ハ三都ノ中デ修行シテ帰テ名ヲ成スモノナリ　医者ニテモ芸州恵美三白　周防南部伯民　長門独嘯庵　常陸原南陽　紀州花岡随軒　名古屋玄医門人芳村恂益　等数多アリ」

長崎浩斎の気宇まことに宏大である。浩斎は法名を釈香潔といい、高岡市の瑞竜寺に葬られている。

むすび

長崎浩斎は大槻玄沢らに蘭学を学び、加越能三州に蘭方外科をもって知られたが、その著『浩斎医話』は医史学的にも興味深い内容と思われたので御報告した次第である。

筆者は先年日本医史学会関西支部大会にて杉田玄白に華岡青洲の乳癌手術の詳細を伝えた宮川順達について御報告申上げ、『医譚』誌（一四）

上に発表させて頂きましたが、その時引用した『浩斎医話』については発表の機会がありませんでした。ここに謹んで本論文を故中野操先生に捧げたいと思います。

終りに種々御高配を賜わった長崎圭爾氏、佐渡養硯氏、山森青碩氏、種々御教示を頂いた片桐一男氏、川島恂二氏、林敦子氏に対し厚く御礼を申し上げます。

文　献

(一) 『近代著述目録後篇』(近世著述目録集成) 勉誠社、昭和五十三年
(二) 高岡市役所『高岡市史』中巻、昭和三十八年
(三) 高岡市役所『高岡史料』下巻、明治四十二年
(四) 津田進三「長崎浩斎著『蘭学解嘲』と小石元瑞について」『日本医史学雑誌』三三巻一号、昭和六十二年
(五) 橋爪恵『巨人高峰博士』三共、昭和六年
(六) 木々康子『蒼龍の系譜』筑摩書房、昭和五十一年
(七) 津田進三「小石元俊をめぐって」『医譚』復刊五四号、昭和六十年
(八) 板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館、昭和六十一年
(九) 片桐一男「河口家と杉田玄白」『蘭学資料研究会研究報告』一六五号、昭和三十九年
(一〇) 川島恂二「河口家と阿蘭陀流外科」『蘭学資料研究会研究報告』二一一号、昭和四十三年
(一一) 津田進三「長崎浩斎と新発見の『蘭東事始』について」『日本医史学雑誌』三三巻二号、昭和六十二年
(一二) 緒方富雄「『蘭東事始』と『蘭学事始』の命名者大槻玄沢」『蘭学資料研究会研究報告』三一〇号、昭和五十一年
(一三) 東京大学明治維新史料研究会『幕末維新風雲通信』東京大学出版会、昭和五十三年
(一四) 津田進三「華岡青洲門人宮川順達について」『医譚』復刊五三号、昭和五十七年

(静岡リハビリテーション病院)

On the "Kosai Iwa" written by Kosai Nagasaki

by Shinzo TSUDA

"Kosai Iwa" is an compilation of the historical research carried out by Kosai Nagasaki, from 1822 to 1836.

Kosai Nagasaki (1799-1864) was a famous surgeon in Takaoka City in Toyama Prefecture. He studied Dutch medicine under Gentaku Otsuki in Edo in 1817. From that time, he used to ask his teacher many questions about medicine.

On the other hand, Kosai studied the Chinese classics eagerly and bad a very extensive library. Therefore, "Kosai Iwa", which includes many short comments on medicine by Kosai, is an interesting book in the medical historical study of the Edo period.